

写生のイデオロギ―

――坂本四方太、声を写す――

端 緒

日本は方言の珍しく多い国、それがいつまでも幅をきかせて居る国であった。私たちが是を単なる停滞と見ず、何かまだ隠れたる歴史上の理由、地理から心理に互つてのくさぐさの原因の、微妙に作用するものがあることを想像して、永い年月の間、注意をこの現象に傾けて居たことは事実であるが、しかも是を以て世のいはゆる標準語化運動の障碍であつたかの如く、説かうとする者かもしれないならば、それはたゞ一種失敗の口実にすぎない。国語の統一は大きな趨勢である。

一九四九（昭和二十四）年、柳田国男は『標準語と方言』と題する著作をまとめる。引用は、一九三九年から一九四七年までの間にかかれた諸論文の巻頭にのせられた自序の一節である。太平洋戦争で敗戦を経た国家で言語政策に大きく関わった一人物の言として「何れも終戦前の仕事であるが、それを一冊にまとめたのは、互ひに説明を補充せしめんが為に他ならぬ。私の立場は以前からちつとも変つて居ない」という言葉ではじまるこの自序を読むと、あまりにも開放的な自己一貫性へのこだわりによって、戦中と戦後が接続された言語観に違和感を禁じ得ない。しかし柳田が語った現在よりはるかに音声メディアが浸透した今日でも、完全に「方言」は駆逐されてはおらず、柳田の時代より遙かにその数や地域を変容させながら「生き延び」ている。むしろ「方言」が様々なメディアによって利用され、その母体語

杉 田 智 美

である日本語の多様性やそれを話し／書く主体の個性を演出する手段になった観さ
えある。

しかし、なぜ「方言」が個性を表現する手段たり得るのかや、「方言」が使用されることそれ自体への疑義は、ほとんど唱えられることがないように思われる。そこでは現象としての「方言」だけが問題にされる素朴なローカリティへの期待が繰り返されているのではないだろうか。

この小論では柳田の『標準語と方言』に典型的にみられるような言語観の二元的構造に楔を打ち込む「方言」の表象を、特に初期『ホトトギス』の中の記述を対象として、「国語」というスタンダードが立ち上げられる一つの過程を元に検証してみたい。「写生」をスローガンに掲げた『ホトトギス』が、どのように口語を写そうとしたのかという問いは、声を写すことの可能性と限界を浮き彫りにするはずである。

一 『ホトトギス』の声

一八九七年一月、正岡子規は松山で『ホトトギス』を発行する。高浜虚子を発行人として河東碧梧桐や内藤鳴雪、佐藤紅緑、寒川鼠骨らが活躍することになる雑誌の出発である。そこからわずか一年九ヵ月後、一月にはホトトギス発行の場を東京に移し、「日本」派俳句の拠点としての第二次『ホトトギス』が幕をあける。子規によって始められた「山会」や「文章会」は子規の死後、周辺に集まった人々を駆

り立て、学生の同人誌的な俳句雑誌『ホトトギス』は「写生文」運動の牙城となつてゆく。

ところで、子規が一八九九年(明治三十二年)年から始めた文章会が、音読披露を原則としていたことはよく知られるところである。ここに集まった人々ほどのようにして「会話」を「文章」へと変えていったかを、「根岸草廬記事」(明治三十二年十二月)によってみてみたい。同記事は、のちに『ホトトギス』子規追悼号(明治三十五年十二月)に発表された坂本四方太の「写生文のこと」によれば、同年二月から文章を批評されていた四方太が、毀譽褒貶の果てによりやく子規に「仮免状」をもらったという文章でもある。

主人はやがて飯を食ふ。飯は茶碗なり。青々例の調子にて、これは奈良茶といふのと又ちがひますか。みな／＼食事はつれば、引つ、きて、八百松の話、精養軒の話、梅月の話、青木堂の話など、再び盛んなり。

主人の北堂、これは苦いか知らぬけれど、何やら見慣れぬ菓子を持ち出でらる。一寸見た処、餡入りカステイラとでもいふべきものなり。こは柚の実を煮ぐり出し、代りに饅頭を二つか三つねぢ込み、之を蒸して輪切りにしたるものにて、茶人が柚味噌の代りに用ふものなりとぞ。吾輩こんなものを食ふは、臍の緒切つて以来、はじめてなり。苦いから、皮を外づして食ひ給へと、主人いふ。柚の皮の苦いは、固より承知と風味試む。

文中にある「青々」とは、弥三郎松瀬青々である。明治二年に大阪船場の薪炭商の長男として生まれ、数学教師や銀行員を経た後、中村良顕の和文会に所属して国学と和歌を学んでいる。松山時代の『ホトトギス』に投句したのをきっかけとして、一九〇一(明治三十四)年十月には上京し、ホトトギス編集員や課題句選者もつとめることとなる人物である。実質上、明治三十二年の「文章会」発足にあたるこの根岸草廬の会に参加しているところを見ると、大阪と東京の行き来は、それ以前にも何度かあったものと考えなければならないだろうが、青々が大阪へ移り住んだのは一九〇二(明治三十五年)年の夏である³。そして青々の言葉は「これは奈良茶といふのと又ちがひますか」と記録されたとおり、四方太によって「例の調子」の上方語(厳密にはいわゆる大阪の船場言葉であろうか)として認識されている。この文

章のなかには、「」の引用符によってくり出されてはいないが、明らかに直接語法を用いて「声」という生々しさを記録しようとした痕跡が認められる。一方数行先には子規の北堂(母親)の言葉として、こちらも「」はない形で「これは苦いかしらぬけれど」とある。しかしこちらの引用は明らかに地の文に引きずられたような文語調になっている。酒井直樹のいうように引用概念やそれを表現する引用符そのものが言説空間の中で制度化されていない時代ならともかく、十八世紀後半の絵入り狂言本のような、語り手や登場人物を明らかに区別するような概念そのものがないという時代ではない。もちろん完全な制度化がされていたとはいえないが、少なくとも口語と文語の文体上の揺れを地の文と会話文との中で葛藤していた四方太にとって、それは意識されないはずなのである。では坂本四方太の葛藤を言語政策との関わりの中で見るとき、どのような問題系を取り出すことができるだろうか。

坂本四方太(一八七三・明治六年―一九一七・大正六年)は文泉子、角山人、虎穴生などの別号をもつ写生文家・俳人である。鳥取藩士坂本熊太郎の長男として生まれ、一八七八年に京都第三高等中学校を経て、一八八四年に第二高等学校(仙台)から大学予科に入学後、虚子や碧梧桐と俳句を通して知遇を得、俳句の手ほどきを受けている⁵。

一八八六年に東京帝国大学文科に入った四方太は、一八九八(明治三十一)年四月より『ホトトギス』の選者となる。子規や虚子、碧梧桐ら中心的な書き手のテクストを縦覧すると、『ホトトギス』の散文作品の口語化は、一八九九(明治三十二)年から一九〇〇(明治三十三年)を境界としていることがわかる。このことは、たとえば、言語学者が認識する「方言にかかわる本格的な国語政策は明治三十年頃にはじまり、その考えは方言を統一して標準語に収斂しようという、国権的性格の強いものであった。」とする言語政策史観が指し示す時期と一致していることは、単なる偶然ではないように思われる。安田敏朗は方言学者東條操の「方言研究のあゆみ」(一九五七年)と題された回顧録を根拠として、近代日本語の成立過程には「三度の山」があったことを指摘しているが、注目してみたいのはそれぞれの「山」が日本の国家としての有り様に大きな変化が生じた時期とほぼ一致していることで

ある。ホトトギス掲載散文の「口語化」は「第一の山」にあたる時期、わずかに先行する二、三年前にあたり、ほぼその山と重なっている。ここで安田がいう第一の山とは明治三十五年以後の国語調査委員会を中心とする方言の全国的調査の時期である。

一九〇〇（明治三十三年）以降、四方太が『ホトトギス』誌上に発表する散文も、文語から口語へと変化しているが、それはどのような形で移行されたのだろうか。坂本四方太という「写生文家」の『ホトトギス』掲載文を見ることがおとし、さらに「口語」の問題へ結びつけてみたい。

二 文体の揺れ——会話のへ今／ここを写す

四方太の散文が最初に『ホトトギス』に掲載されるのは、一八九八（明治三十一年）十月（二巻一号）の「雑話」で、文体論の体裁をとる二頁余りの小論である。「明瞭」と「露骨」、「幽玄」と「朦朧」などを比較しながら「写生」を概念規定したものである。誌面で前後のページを占めた「俳諧無門閥」（俳狐道人）と「小園の記」（正岡子規）が完全な文語体であることもあり、四方太の口語体はジャンルを問わずに見ると『ホトトギス』内では早い時期のものである。次が同年十二月（二巻三号）の「山」、複数人が山をテーマに少しずつ分担しているが四方太は「○僕は山の中で育つたのですが、山はつめたい感じがして嫌ひです。町の方が温かき善い。（四方太）」とだけ記している。これもほぼ全員が文語文や漢文訓読調であるなか、極めて早い口語体の使用例である。しかし翌月明治三十二年一月（二巻四号）の同企画「夢」では、全体の調子に合わせるかのように、和文脈の文語体となる。この頃の四方太は、口語体を志向しながらも、意識的に口語に執着するという態度を持ち得ていないといえるだろう。

一九〇〇（明治三十三年）年の言文一致会結成、一九〇二年の国語調査委員会による言文一致体推進の動きが間近に迫った時期であることを考えれば、むしろこのような四方太の態度は慎重でさえある。だが実作的な場に直面したとき、四方太がスタイルを文語体にするのか、口語体の形式を採るのかという選択は、この時点で

は、常に揺れ続けていたというのが妥当な見方だろう。たとえば、「田園日記」（一八九九・明治三十二年一月）や「鮒釣」（同十一月）では地の文は文語体を守りながらも、会話は口語文で表記されるという特徴があり、これも口語／文語の揺れという先の見方を裏付ける。これらに共通してみられる文体の揺れをどのように意味づけることができるだろうか。「田園日記」と同一八九九年十一月の「鮒釣」をみてみたい。

十日。二百十日、一天晴れ渡りて裏山秋高く風穏やかなり、いでや野川に釣りすべくとて庵を出づ、稲大方花散りて穂は垂れがちに千頃の浪を打寄せたり、厄日十日の間幸にして風雨の災害もなく民安堵の思をなしてこゝに愁の眉をひらく、この調子でいつたら今年は大豊作だと道行く人の物知り顔なるもめでたし夕方鮒すこし獲て帰りぬ
（「田園日記」傍線引用者、以下同）

三時も過ぎぬ、待てどもく少しも釣れず、やをら立ち帰らんとて背伸びなどす、たま／＼老爺村の方よりくはえ煙管にて橋を渡りきて我方に歩み寄りつ、釣れますかといふ、いやちつとも釣れぬ何処かよい釣場はないかと問ふ、さればでござります村の出口にも一所ござりますが今日は騒がしうて逆も釣れますまいと覚束なげにいふ、はアそうかナ先程念仏鐘が鳴つたのはあれは何かナといへば、あれは昨日村長様の娘御がなくなられて今日は葬式でござりますので寄せ鐘を叩いて人を集めたでござりますといふ、
（「鮒釣」）

二つの散文に共通するのは、文全体が文語体であるなかで、「田園日記」の「この調子でいつたら今年は大豊作だ」という部分と、「鮒釣」に見られる「さればでござります」から「集めたでござります」までの直接引用の形で会話を写した部分とが、口語体で書かれている点である。会話を口語体で書けるならば、地の文を含め全体を口語体で統一することによって文体は確立されるはずである。しかし中山昭彦や紅野廉介の指摘にあるような、地の文が括弧でくくられた会話を主導するという地の文——会話文という序列は、やはり可逆性（会話文による地の文の制御）を持ち得ないのかもしれない。先にふれた「山」や「墓」（明治三十二年九月）はこの「鮒釣」より前にかかれていたが、短いながらも口語体によって全体を統治

する文体を四方太は持ち得ていた。それならば、四方太の文体の完成を阻害するものとは何だったと考えるべきだろうか。

先の「根岸草廬記事」の続きには、書き手自身の心内語にあたる部分「吾輩こんなものを食ふは、臍の緒切つて以来、はじめてなり」という一文が記されていて、こちらにも「食ふのは」や「はじめてである」といった口語体が採用されてはいない。また下線部分「こは柚の実を多ぐり出し、代りに饅頭を二つか三つねぢ込み、之を蒸して輪切りにしたるものにて、茶人が柚味噌の代りに用ふものなり」は他の人の声でもなく、また自分の心内語＝声でもない言葉、いわゆる地の文に近く説明としての読み手に向けた「文」が挟み込まれている。こうした語りは書き手自身の内的発話にせよ、子規の母親の言葉にせよ、明らかにその時に発せられた、あるいはその時に心中に浮かんだ生のことばではなく、この文章を書いている時点での書き手四方太によって制御される「書き言葉」＝文である。もし、写生文の真価が状況の再現性という点にあるならば、四方太の「根岸草廬記事」は失敗であるが、それが様々な声や言葉の多層性を「写す」という散文実験であった点は評価すべきだろう。

「根岸草廬記事」を文語文による写生の文体の完成の一過程として見た場合には、青々の言葉がその「声」を再現することに忠実であったために、文語文としての統一を欠いたものとなったという結論になる。統御されていた文章全体が、「これは奈良茶といふのと又ちがひますか」という上方言葉の「言」と「文」の一致によって、その均衡を失ったという考え方を導入すればよい。もし、青々の「声」を、文語として、たとえば「こは奈良茶といふものと又ちがふか如何」とでも書いたならば、この時点での文語を使用した写生の試みとしては、「言」——「文」の一致という価値とは次元を同じくしないが、一つの到達を見たことになる。しかし、それが統一されなかったために「声」は「方言」を通して、生き残ったのだといえる。

それでは、青々の「声」と他の人物（子規、北堂、碧梧桐、虚子、他）たちの「声」との差はどこにあるのか。それは「方言」か否かという点に尽きよう。文語体の書記化された会話文を、先行するテキストの中から拾い出して再現すること

は、ホトトギスに集まった書き手には難しいことではなかっただろう。しかし「方言」を現在自分が話すことのない文語の形で地の文に埋め込むという作業を、四方太は選択しなかったということではないだろうか。「できなかった」というよりは「選択しなかった」という根拠は二つある。

その一つは、四方太の演芸全般への関心であり、これについては特に四方太が関心を示した落語をはじめとし、講談本、浄瑠璃、近世の草双紙の類があり、これらに「江戸語」以外で書かれた「声」のテキストが存在するからである。もう一つは、四方太の、*「今／＼」*で話されている「方言」への関心である。

三位相語としての「東京語」

坂本四方太の死後編まれた『ホトトギス』の四方太追悼号（大正六年七月号、2010（『噫文泉子』）のなかで大谷繞石は、四方太が「不用意に話す田舎者の対談なんか注意して写生した」こと、「他人の口癖や音声の抑揚を真似る事は頗る旨かつた」ことなどを書き残している。四方太が移り住んだ鳥取県岩井郡と京都市、仙台市は、いずれも全く異なった「方言」をもつ地域であり、その違和感や疎外感を、若い四方太が敏感に感じ取ったであろうという事は、想像に難くない。彼の口語による写生文の完成や、口語そのものへの関心について考えるとき、彼の出自は看過しえない。同時に、「方言」をめぐる言語統制の論議喧しい明治二十年代後半から三十年代にかけての国語学者や文人たちの言語的闘争と切り離して考えることは不可能であろう⁹⁾。

上田万年は一八六七年に江戸大久保の名古屋藩屋敷で生まれ、東京で育っているためでもあろうか、実体としての一つの「国語」「日本語」の存在には初めから疑いを入れていない¹⁰⁾。とした上で、「上田の認識としては、『三千年來われわれの使つて居る日本の言葉は、畏れ多くも上は 天皇陛下より、下は 極々卑しい村落の百姓までが普通に用ゐて居る言葉である』というように、ごくあつさり」と『日本の言葉』の歴史的・一貫性と階層的同一性を認めてしまっている

と安田敏朗は分析する。無論ここから逆説的に、四方太には歴史的・一貫性と階層的同一性に疑義を差し挟むことができたといえるわけではない。だが、四方太にとっては「方言」が現在性と現前性を実現するシステムとして意識されており、地の文に制御しきれない亀裂としての会話を描くこと、それこそが彼にとつての写生の目的の一つであったといえるのではなからうか。

四方太の散文が地の文、会話とともに口語に統一されるのは、明治三十三年一月「下宿屋」からである。付け加えておくならば、このころの『ホトトギス』の常連執筆者たちの中でも、地の文を差し挟まず、直接話法で書き続ける場面を多く持つのは、四方太に見られる大きな特徴である。そしてこの「下宿屋」は、のちに子規たちとの文章修行から四方太が得た成果として語られる記念碑的な位置付けの写生文¹⁰でもある。この写生文は、引越し先の新しい部屋¹¹の描写にはじまり、下宿人たちの様子や会話を次々に描写した小品である。この下宿屋には二十幾人の下宿人¹²があり、書生を筆頭に、国民英学会に通っている学生、腰弁で外務省に通う「小役人」などで占められている。そこに彼らの世話をする「下女」が二人いる。

一人のやつは実に夥しい顔つきで、一寸形容の仕様もないが、強いていは、先づ不等辺三角形とでもいふのだらう。目は猿のやうで、……(中略)……東京ひろしといへども恐らく又とあるまいとのこと、それさへあるに此女の口のき、様が又頗る変なので、これも人々の笑ひの種になる。それは、於早う御じやますとか、お内で御じやますとか、何んでも詞の尻に、御じやますをつけるのださうで、その語原はいふ迄もなく、御座いますの約言だというふ説である。今一人のやつも、多少如何はしい女ではあるが、併し御じやますに比べると、余程人間らしく見える。勿論勢力は此方にあるのだ (下宿屋¹¹)

この「下女」は、「御座います」「御じやます」と発声することで「人々の笑ひの種」になる。先にも引用した大谷繞石の証言、四方太が「不用意に話す田舎者の対談なんか注意して写生した」とはまさにこういった点で裏付けられる。四方太から見て「田舎者」、あるいは「江戸語」「東京語」の規範から外れる者は、その写生すべき最たる特徴として手厳しく再現され「田舎者」であることを暴かれてゆく。先に見た「根岸草廬記事」での子規の母親、あるいは子規自身もそうである

し、この総勢二十人にもなる下宿人たちの凡てが東京地方で話される言葉を操ったかどうかは、実際のところ極めて疑わしい(ホトトギスの書き手はほとんどが非東京出身者)。けれど、下宿人たちは次々と「非田舎者」の象徴たる「書生ことば」を展開する。

「佐藤か。まア這入れ、今勸進帳をやつてゐるんだ。」「よししてくれ。冗談ぢやないぜ。ときに、どうだ、往かないか。」「こうつと今夜は……」「京子の三十三間堂に小清の御殿。」「往かう、山田君、往かないか。」「僕は、まアよさう。」「ソナニ勉強すると、肺病がでるよ。」「ふム、ちと肺病にでもなりたいんだ。」「和歌浦には名所が御座るか。一に権現二に玉津島だ。佐藤傘がいるか。」「ナニ、上つてるよ。」「さうか、そいつはありがたい。一寸来てくれたまへ、足袋をはくから。」「此時例の下女が来て「佐藤さん。寄席に入らつしやるので御じやますか。」「ハイ左様で御じやますで御じやます。」「アラ憎らしい、大きに御世話様で御じやますよ。」「フウ、やつぱり御じやますだ。わッはッは、山田君、それじゃ失敬。」¹²

嘲笑の対象になりながらも、自分の言葉を操ることが出来ない「下女」を相対化するものは、一樣に「書生ことば」を用い、「言語的弱者」を作り出しそれを取り囲む集団である。「書生」という文化階層が用いたこの独特の位相語は、彼らの出自を見えなくする隠れ蓑として機能している。そう考えるならば、ここで再現されている写生とは、ある階層語が別の階層語を序列化する道具であり、同時に書生ことばが下女の作り出した位相語を抑圧する、書生や腰弁の役人たちのもつ「空気」でもあり、一人一人の話す個人的言語の再現に忠実であろうとする「写生」の目的とは、対極に位置するものである。この時点で四方太の口語的写生文をひとつの「文体」として支えていたものは、「声を写す」ことで「写生」を目指す方ではなく、捏造された「言」「書生ことば」によって一人の女性の「声」「方言」を打ち消して成立するリアリティである。実際に写すということが高い再現性を保証するという事実(「御じやます」と同時に、或る部分をデフォルメして伝えること(「抑圧」が、同一階層に所属する者たちの連帯感を裏付け補強するという、事実の露呈である。

「下女」の側に寄り添って、もう一度捕らえ直してみよう。「下女」が東京出身者か否かはこの散文からは受け取れないが、仮に彼女の出自がどのようなものであれ、彼女の話す位相語は、彼女の無教養を暴露することはあっても書生たちの嘲笑から自らを守る隠れ蓑には成り得ていない。彼女は自分の話す言葉を、書生に奉仕するという職業的位相に従って翻訳しようとして挫折しているのだといえる。また「御じやます」を「笑いの種」にする書生たちの残酷さは、社会的階層において上層に位置する(という勝手な位置づけによって)自分たちが、それを当然のこととして「東京ひろしといえども恐らく又あるまい」という「夥しい顔」と結びつけた上で、非東京人として語られる点にある。「御座います」を「御じやます」としか発音できない「田舎者」は、嘲笑の対象になる。それは結果、同一階層に属する書生達の連帯感呼び覚まし、同時に「東京人」としての自己同一性を保証する。

「下宿屋」に展開するヒエラルヒーは、四方太たち「ホトトギス」の中心的書き手たちが、みな地方出身者であり、同時に東京へ「文学」の志をもって上京してきた人々と構成されているという点にも起因する。東京に生まれ育たなかった者にとつての「標準語」を、上京後に身体化しようと努め、国家の中央に位置し、そこで近代化し統一化されていく過程をトレースするように自分たちの雑誌を発行しつづける。書くことの出发点で、「方言」を地の文に塗りつぶしてしまうことに立ち止まった四方太が、こうした形でしか「声」を「文」として拾えなかったことは、当時の標準語と方言をめぐることの難しさを露呈してしまっているのである。

四 方言を懐古する場所へ

四方太が『ホトトギス』に次々と散文を掲載するころ、子規は病床で「俳話」(一九〇〇・明治三十三年十月三十日号)での問答形式の文章や、数行の説明をのぞき全文が会話文で構成された「初夢」(一九〇一年一月三十一日号)を書く。「初夢」の中には、家人(おそらくは母親)や車夫、書生時代の下宿屋の婦人の話しぶりが描かれている。しかし故郷松山についての回想や、方言や階層に関する極端な言及は少ないように思われる。遡ること十数年、子規は自らの故郷松山の変化につ

いていくつかの点を列挙している。そのなかに「一、総べての風が東京に似ること言葉も多少東京に似ること」という項目がある。生前未発表の「筆まかせ」は、四国仙人/沐猴冠者という署名で翌年も書き続けられており、そのなかに「言語の変遷」とする一文がある。ここでは前年一行だけふれられた言葉の変化について、さらに踏み込んだ感慨がのべられている。

言語も追々一樣になるの傾きあるが、さらば何地方の語が全国に流行するやといふに、どうしても首都たる東京の語なり、何人でも一度や二度は出かける東京において地方言は用ゐられぬ故、多少東京語のまねするに至るなり。また地方に出ても東京語ならば見苦しきことなし、否むしろ威張りたる位なればいやくも多少東京語を解する者ハ皆これを使用すれど、甲地の人が乙地に在て自分の故郷の方言を談ずることは能はざるべし、さればその地の方言を習ふか或ハ東京語を話すの二途あるのみ、ここにおいて東京言葉ますます勢力を得るに至る。

この「言語の変遷」は、言葉の言い回しのようなレベルだけでなく、東京からの人や物の流入が故郷の空間そのものを淘汰していく様子にふれており、一八九〇年代の早い時期に、子規はすでにローカリティが危機に瀕しているという認識を持ち得ている。それと同時に言文一致になった「東京語」と「江戸語」の連続性を根拠にした山田美妙に代表される「標準語」観をこの時点での子規も共有していることが伺えるだろう。イ・ヨンスクの指摘通り、山田美妙らが「江戸語と東京語との連続性を強調することで、現在の東京語の標準的地位を正当化したのだが、実は江戸語と東京語との間には一つの断絶があったことも忘れてはならない」¹⁴⁾だろう。空間(地域)に依拠した「江戸語」が、「東京の士君子」、「東京中流社会のことば」という階層性に依拠する言語になるとき、「東京語」は「標準語」へと接続される。子規のいう「地方に出ても東京語ならば見苦しきことなし」という根拠は、こうした教養人の上昇志向と中央志向とに支えられている。ある階層に限定された人々の話す「標準語」は「見苦しきこと」がないという意味なのである。¹⁵⁾「甲地の人乙地に在りて」体験する異なる地域間でのコミュニケーション不全は、地域差によるだけではなく、新たな中流社会や教養層として東京に移り住んだ子規や、前

節で述べた坂本四方太の写生実践によって強化される。

言文一致という社会目的化された言語規範によって「方言」は駆逐されていくという「国語」統一の趨勢に対して、四方太の「方言」への注目と記録的眼差しは一種の抵抗であったのかもしれない。しかし、四方太の声を写す写生文は、「書かれた言葉」として「方言」を尊重しようとする姿勢と、「話される方言」を抑圧する構造を立ち上げてしまうのである。そうした写生のイデオロギーは、「方言」を生じた現在にしかない「死んだ言葉」の領域に追いやられ、「東京語」という位相語を「標準語」へと押し上げる、その原動力となっていたのである。

注

- (1) 『柳田国男全集』（筑摩書房刊）によれば、全十一編からなる同書は、一九三九（昭和十四）年～一九四一（十六年）に発表されたのだが、書き下ろしをのぞく一編「国語史の目的と方法」（一九四七年）だけは戦後に発表されたものである。
- (2) 鈴木章宏は「商標としての『写生文』」（『漱石研究』第七号一九九六年十二月、翰林書房）のなかで、「写生文」という言葉は子規自身の使用例が極めて少なく、死後周辺の人間によって事後的に作り上げられたことを指摘している。
- (3) 「僕なども頻りに写生を勧められたから漢学も和学も何等の素養のないものには是れ幸とむやみに言文一致で以て書散らしたが今日では未熟ながら兎に角我派の写生文仲間との末席に列なつて明治の美文は写生文の他にないと信ずるに至つたのは僕の最も名譽とする所である。扱て同冊二年の夏頃になつて、大坂から青々が遣つて来てホト、ギスを手伝ふ事になつてから文章熱は一層盛になつた。青々は俳句も上手なり学問もあつたが写生文には手古摺つたと見えて大分手ひどく遣られた様だ。何しろ斯う文章が盛んになつた以上は俳句会と同じく文章会を遣つたら善からうといふので十一月に至て其第一会を催した。」（坂本四方太「写生文の事」一九〇二年十二月『ホトトギス』子規追悼号）とある。
- (4) たとえば、十八世紀後半の歌舞伎の台本と異なつて、絵入り狂言本には、語り手や役者や観客の視点を同定するための文法的標識が備わつてはいない。（略）当時は引用符やそれに相当する記号は知られていなかったのである。（略）引用概念、すなわちある人の会話を他の人の会話と区別するという考えそのものが、この言説空間では制度化された実践として定着していなかったのである。（酒井直樹『過去の声』二〇〇二年六月、以文社 一九九頁）
- (5) 四方太と子規をはじめとする『ホトトギス』執筆者たちとの関係については、「思い出づるまゝ」（一九〇二年十二月『ホトトギス』子規追悼号）に詳しい。
- (6) 下野雅昭「日本の国語政策と方言」（『新・方言を学ぶ人のために』一九九一年二月、世界思想社）
- (7) ちなみに第二の山が昭和三年以後東京方言学会を中心とし東西の大学に方言研究の学会が結成され、研究発表の機関雑誌「方言」が発行された時代、第三の山とされるのが昭和二十三年設置の国立国語研究所を中心とする地方語の研究の起こった時期であるとする（『国語』と『方言』の間）一九九九年、人文書院）
- (8) 中山昭彦「翻訳する／される（言文一致）——多言語性と単一言語性の間——」とその後質疑応答における紅野謙介の指摘（『日本文学』vol.47—4 一九九八年四月）
- (9) 安田敏朗「帝国日本の言語編制」（一九九七年十二月、世織書房 三十四頁。）
- (10) 「こんな工合に上げたり下げたりして奨励されたものだから益々勇気を鼓して駄作を試みた。子規子始め他の諸子も熱心に作られた。ホト、ギスの第三巻第四号にでた小品文は多く此研究の結果である。」（『写生文』『ホトトギス』子規追悼号、明治三十五年十二月二十七日）
- (11) 坂本四方太「下宿屋」一九〇〇（明治三十三年）年一月『ホトトギス』
- (12) 四方太「下宿屋」前掲
- (13) 「帰郷中目撃事件」（『筆任せ』（明治二十二年）
- (14) イ・ヨンスク「国語という思想」（一九九六年十二月、岩波書店）
- (15) 「江戸っ子」を自称する青年の登場する「坊っちゃん」（明治三十九年四月『ホトトギス』）には、同じ江戸っ子の画学教師野だいこが「御国はどちらでござす？」と話しかけて坊っちゃんが江戸っ子を返上したいと語る場面が描かれる。一方で野だは文学士で教頭の赤シャツに対しては「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね」と答えるのである。野だは東京を経由した二人の人間に対して、江戸語と東京語とをスッチできる人物である。子規同様の「見苦しきこと」を内面化した人物造形である。

The Ideology of sketches

——SAKAMOTO Shihota, Sketching Voices——

SUGITA Tomomi

Abstract : This Thesis is the study of essays in the magazine HOTOTOGISU, by SAKAMOTO Shihota (1873–1917). In the 1900s, HOTOTOGISU's authors aim was to write a sketch of spoken Japanese language. Shihota, using the method of sketching, tried to reproduce spoken language which is discussed here. Shihota took uncontrollable conversational style writing and sketched it in the written style language. But, on the other hand, his challenge was how to help the organization of one hierarchical language by using another one. His sketch essays suppressed the lower class women and strengthened the solidarity of the students language and the people who used it. From there is where the slogan “sketch” held up HOTOTOGISU's possibilities and limitations which became apparent.

This Thesis will hopefully help in the process of research by using the Japanese language as its standard.